

ワークブックにおける一般ユーザー向けOracle Analytics Assistant有効化ガイドライン

Oracle Analytics Cloud管理者がコンシューマーユーザーにOracle
Analytics Assistantを公開する際のベストプラクティスを説明しま
す。

2025年9月、バージョン1.0

Copyright © 2025, Oracle およびその関連会社 Public

免責事項

本資料は、いかなる形態（ソフトウェアまたは印刷物）においても、オラクルの独占的財産である専有情報を含みます。本機密資料へのアクセスおよび使用は、お客様が締結し遵守することに同意したオラクルソフトウェアライセンスおよびサービス契約の条項に従うものとします。本資料および本書に記載されている情報は、オラクルの事前の書面による同意なしに、オラクル社外のいかなる者に対しても開示、複製、複写、または配布してはなりません。本書はお客様のライセンス契約の一部ではなく、またオラクル社またはその子会社もしくは関連会社とのいかなる契約にも組み込むことはできません。

本ドキュメントは情報提供のみを目的としており、記載された製品機能の導入およびアップグレード計画の策定を支援することを唯一の意図としています。いかなる素材、コード、機能の提供を約束するものではなく、購入判断の根拠として依拠すべきではありません。本ドキュメントに記載された機能の開発、リリース、およびタイミングは、オラクルの単独の裁量に委ねられています。製品の性質上アーキテクチャ上、コードの重大な不安定化リスクを伴わずに、この文書に記載されているすべての機能を安全に組み込むことができない可能性があります。

改訂履歴

本ドキュメントは初回公開以降、以下の改訂が行われています。

日付	改訂
2025年9月	初回公開

著者: フィリップ・ライオンズ

寄稿者: ラリタ・ヴェンカタラマン、ジャック・ヴィジャン、ラクシュ・マミッラバリ

目次

免責事項	2
改訂履歴	2
1. 概要	4
2. データセットエージェントの定義	5
2.1. どのような種類のデータセットがデータセットエージェントとして使用できますか？	5
2.2. データセットエージェントに追加する列	5
2.3. ローカル主題領域の使用に関する追加ガイダンス Dataset-Agent	7
3. インデックス設定とワークブックコンシューマーアシスタントの有効化	10
3.1. データセットエージェントでのOracle Analytics Assistantインデックス設定 データ	10
3.2. ワークブックでの Oracle Analytics Assistant の設定	10
3.3. コンシューマーユーザーがOracle Analyticsにアクセスするための権限設定 Assistant	11
4. Assistant 消費者プロンプトガイドライン	13
5. 制限事項と回避策	14

1. 概要

このドキュメントは、Oracle Analytics Assistantがコンシューマーユーザーの指示に対して最適な応答を提供するために、データインデックスを最適に構成するガイドラインを説明します。

コンシューマーユーザーは、ワークブックのコンテキストから直接Oracle Analytics Assistantにプロンプトを送信します。この際、ワークブックの基盤となるデータセットの詳細は一切提供されません。コンシューマーは、データセットに含まれるオブジェクトの範囲に関する知識を一切有していないものと想定されます。彼らはワークブックの正確なドメインに関する機能的な質問を投げかけ、そのコンテキストにおいてOracle Analytics Assistantから関連性のある回答を期待します。

ワークブックが単一の機能領域に焦点を当てた狭いデータソースから取得される場合、Oracle Analytics Assistantはワークブックと同じデータセットを直接活用し、明確で文脈に沿った回答を生成できます。しかし、ワークブックが複数の特定の機能コンテキストにまたがる広いデータソースから取得される場合、Oracle Analytics Assistantが曖昧な回答を返すリスクがあります。例えば、多くの列を含む大規模な主題領域の場合、これらの多数の列をインデックス化すると、ユーザープロンプトが多様な列の存在により異なる解釈をされる可能性があるため、Oracle Analytics Assistantがワークブックの文脈を超えた近似回答を生成する恐れがあります。インデックス化されている。より具体的には、消費者ユーザーはOracle Analytics Assistantの回答がワークブックドメインの文脈に厳密に留まり、基盤となるデータソースがこの文脈よりもはるかに広範であることを認識していないという暗黙の期待を抱いている。しかし、その広範な範囲はOracle Analytics Assistantの回答精度に劇的な影響を与え、精度を低下させる可能性がある。

したがって、ワークブックが大規模／広範なデータセットから取得される場合、ベストプラクティスとして、Oracle Analytics Assistant専用に供給する代替の縮小ソース（データセットエージェントと呼ばれる）を作成します。このデータセットエージェントの列は、特定のワークブックの機能領域にのみ焦点を当てます。これらのデータセットエージェントの目的は、特定のワークブックまたはワークブック群の機能的文脈において、Oracle Analytics Assistantにデータを提供するのみです。これらは、Oracle Analytics Assistantの使用を供給する目的で、特定のソースとしてワークブックに添付することができます。

このドキュメントでは、これらの特定データソース（データセットエージェント）を定義するための各種ガイドラインを記載しています。

- **前提条件：**特定の機能領域に焦点を当てたワークブックまたはワークブック群を特定し、そのワークブック群に対して消費者ユーザー向けにOracle Analytics Assistantを有効化すること。
- **バージョン：**本文書は V25-09-1 版であり、**2025年9月の Oracle Analytics Cloud アップデート**で利用可能な機能に基づくガイダンスと制限事項を強調しています。製品は絶えず進化し機能強化されるため、本内容の定期的な更新と修正が行われることを想定してください。

2. データセットエージェントの定義

2.1. データセットエージェントとして使用できるデータセットの種類

データセットエージェントは、様々な種類の静的永続化データセットで構成できます：

1. 元の対象領域が大きすぎる場合、ファイルベースまたはテーブルベースのデータセットが最も堅牢な推奨事項です。この場合、対象領域からデータを抽出し、Oracle Analytics Assistantで使用するための永続化データセットを作成してください。
2. 場合によっては、作成者がローカル対象領域を代替の集中ソースとして活用することもあります。これらは2025年9月時点で追加の機能的制約をもたらします。永続化データセット（ファイルまたはテーブル）が利用可能な場合、現在はローカル対象領域よりも優先されます。Oracle Analyticsでは複数の製品開発が進行中であり、今後のリリースでこれらの制限が急速に緩和される点に留意してください。

以下の表は、2025年9月時点でデータセットエージェントに使用可能な各種データソースを一覧表示したものです。

	A – Indexing Subject Area	B – Index Focused Persisted Dataset (file, table, dataflow output)	C – Index Focused Live LSA
① Assistant Answer Ambiguity Risk	Proportional to SA 'Size'	Low	Low (small LSA)
② User-level Data Security	Native	None (or Re-defined for dataset)	Native
③ Data Freshness	Live	Requires Update Schedule	Live
④ Data grain	Dynamic	Fixed	Dynamic
⑤ Advanced Agg. Rules (time based, etc...)	Native Complex Aggs	Simple & Persisted Aggs only	Partial Complex Aggs
⑥ Extending Context (Join data)	No	Possible	Possible
⑦ End-user Perf Experience	Average	Faster	Average
⑧ Data Volume Size Limits	No limit	DSS limits	No limit
⑨ Other AI features	Limited (CI)	All	Limited (CI)

2.2. データセットエージェントに追加する列

選択したワークブックで使用されているソースから列を選択し、データセットエージェントを作成します。

1. **データセットエージェントには、限られた数の列のみを含めること。**データセットエージェントには、ワークブックの機能的コンテキストで使用される、または必要な列のみを含める。ワークブックで明示的に使用されていなくても、以下の条件を満たす場合、ワークブックのコンテキストに近いデータ列はデータセットエージェントの候補となり得る：
 - a) 消費者ユーザーがこれらの列に関連する質問やプロンプトを投げかける可能性があることが想定される場合。
 - b) Dataset-Agentに追加しても、既存の列との潜在的な曖昧性は生じません。
2. **データセットエージェントでは高カーディナリティ列を避けること。**Order_idや顧客名など、多数の異なるメンバー（1,000以上）を含む可能性のある列は含めないでください。高カーディナリティ列は通常、インデックス作成時間を増加させ、多くの「高レベル」消費者ユーザープロンプトへの回答において最終的に重要でない可能性があります。
プロンプトへの回答において最終的に重要でない可能性があります。
3. **日付に関する考慮事項。**

a) 単一の Dataset-Agent 内で複数の機能日付を使用することは避けてください。

1. 可能な限り、複数の機能日付階層ではなく、1つの機能日付（日付階層セット）のみを Dataset-Agent に含めるようにしてください。例えば、**注文日**、**出荷日**、**請求日**はすべて販売に関する主題領域の一部である別個の日付階層です。理想的には、これらの階層のうち1つだけをデータセットエージェントに含めるべきです。1つのデータセットエージェントに複数日付階層を持つと、Oracle Analytics Assistantの応答に曖昧さが生じるリスクがあります。例えば、「**過去2四半期における商談金額を表示してください**」という要求です。「過去2四半期」とは、過去2請求日付四半期を指すのか、それとも過去2発注日付四半期を指すのか？日付オブジェクト名を明確にマークすることでこの曖昧さは軽減できますが、日付タイプが指定されていないため、上記のような質問では、消費者が最初の質問をプロンプトした際に期待する日付が返ってこない可能性があります。
2. 単一のDataset-Agent内で消費者ユーザーに複数日付へのアクセスを許可する必要がある場合、時間関連の質問時には常に参照する**機能日付タイプ**を明示するよう要求してください
これは消費者ユーザーにとって必ずしも直感的ではない場合があります。例えば、**注文日付オブジェクト**と**出荷日付オブジェクト**の両方がデータセットエージェントに含まれている場合などです。

b) カスタム（グレゴリオ暦以外の）カレンダー（会計年度カレンダー）：ワークブックソースが、会計年度がグレゴリオ暦形式（1月1日～12月31日）と一致しないカスタムカレンダーを利用している場合（例：Oracleの会計年度は6月1日～5月31日）、時間を含む日付を慎重に含める必要があります。

インデックス作成用のデータセットエージェント内のレベルオブジェクト。このユースケースでは、単に**日付**データ型の列をデータセットエージェントに追加するだけでは、Oracle Analytics Assistantが常に正しい応答を返すとは限りません。Oracle Analytics Assistantはグレゴリオ暦に基づいて時間を自動的に集計し、1月1日から12月31日までを1年間とみなします。正しい時間集計結果を得るには、Dataset-Agentから**日付**データ型の列を削除し、カスタムカレンダー用に計算された時間階層レベル列（**月**、**四半期**、**年**）のみを追加する必要があります。例えば、Oracle会計年度カレンダーの場合、第1四半期（Q1）には6月、7月、8月が含まれます。

4. データセットエージェントのメトリック集計ルールを適切に設定してください。データセットエージェント（ファイル/テーブルベースのデータセットまたはローカルサブジェクトエリア）を構成する際、メトリック型列にはデフォルトで合計（Sum）集計ルールが設定されます。これは、クエリ内のすべての集計操作においてメトリックに合計が適用されることを意味します。

- a) 一般的に、データセットエージェント内の各メトリックに対して、これが正しい集計ルールかどうかを検討する必要があります。例えば、年齢のような加算できないメトリックの場合、集計ルールを平均値に上書きする必要があります。他のデータセットと同様に、メトリックが適切に動作するために必要な場合、データセットエージェントでデフォルト設定されている集計ルールを手動で上書きすることが求められます。
動作させるためには、デフォルトの集計ルールを手動で上書きする必要があります。大まかに言えば、集計ルールの上書きが必要な典型的なオブジェクトは、**Count**、**Count Distinct**、および**平均値**です。分子と分母を持つ比率計算のメトリックは、データセットエージェント内で**平均集計ルール**に上書きする必要があります。
- b) データセットエージェントのメトリックが集計ルール上書きを必要とするか確認する最も効率的な方法は、手動テストです。Oracle Analytics Self-Service（このテストではアシスタント不要）でクエリを手動構築し、当該データセットエージェントのメトリックを同一エージェント内の他の属性オブジェクトと組み合わせてください。**ピボットテーブルの合計**を（行と列の両方の）**テーブル**に設定し、クエリ結果が正しいことを視覚的に確認してください。
行と列の両方に設定し、クエリ結果が正しいことを視覚的に確認してください。

5. 列名と説明の考慮事項。これは結果の正確性に影響する重要なステップです。列を意味のある名前に変更してください。列名を変更する方が、単に

同義語の追加。同義語の追加も推奨されますが、列名は同義語よりもLLMの解決に大きな影響を与えます。ただし、列の説明はデータパネルのツールチップとしてのみ機能します。これらは現在LLMで使用されておらず、Oracle Analytics Assistantパネルにも表示されません。

6. 計算式とグループ化でデータセットエージェントの列を強化する。

- a) データセットエージェントに機能的な計算式を追加してください。データセットエージェントにまだ存在しない場合は、比率計算など、よく使用される計算式を追加してください。なお、Oracle Analytics Assistantは、データセットに存在しない場合でも、パブリックドメインの知識を使用して実行時に簡単な計算式を作成できます。
- b) グループ化でデータを拡張する。
 1. 数値を理解しやすいカテゴリに変換します。例：シルバー、ゴールド、プラチナ顧客（**総売上高**）、小規模、中規模、大規模注文（**注文量**）、高/低業績従業員（**業績評価**）。
 2. グループ化を作成します。データ準備ツールを使用して、Oracle Analytics Assistantクエリ用のクイックアクセスグループを作成します。
- c) ナレッジリポジトリでデータを強化します。国を大陸に、医薬品をカテゴリーにリンクするなどのスマートな提案を活用してください。
- d) Null値。音声クエリがNull値を「不明」や「利用不可」などの説明用語に変換して処理できるようにします。

7. 複数の外部ソースでデータセットエージェントを拡張。単一のデータセットエージェントがマルチテーブルデータモデル内で複数のソースを結合可能。データセットエージェントのデータモデルには、追加のコンテキスト対応ソースを含め、適切に結合された状態で組み込まれます（Oracle Analytics Cloudマルチテーブルデータモデル定義）。これによりOracle Analytics Assistantインデックス処理が拡張データセット上で実行され、外部データが回答の一部として組み込まれます。

定義）。これにより、拡張されたデータセットに対してOracle Analytics Assistantインデックス作成を実行でき、Oracle Analytics Assistantが回答の一部として外部データを含めることが可能になります。

8. Dataset-Agent内の地理関連列にデフォルトのマップレイヤーを割り当てます。一部のデータ列では、レンダリング可視化をデフォルトでマップとして設定する必要がある場合があります。例えば、「Warehouse Location」や「Seat Location」といった列は、デフォルトでマップとして可視化されることを意図している可能性があります。Oracle Analyticsのデータ準備環境では、作成者がデータセット列（主題領域列ではない）にデフォルトのマップレイヤーを割り当てられます。列を右クリックし「Location Details」を選択します。これにより作成者はオブジェクトに適切なデータレイヤーを割り当てられ、他の可能性のあるレイヤーとの混同を回避できます。

重要な点として、オブジェクトがOracle Analytics Assistantで使用される場合、視覚化はデフォルトでマップになります。

これにより、Oracle Analytics Assistantを利用するエンドユーザーにとって、より優れた操作性と洞察が得られます。

2.3. ローカル主題領域をデータセットエージェントで使用する際の追加ガイダンス

ローカルサブジェクトエリアをデータセットエージェントとして使用する場合、追加の制限事項とガイドラインが適用されます。Oracle Analyticsではこれらの制限を解消する複数の開発が進行中であり、今後のリリースで対応予定です。

1. **ローカルサブジェクトエリアのデータアクセスタイプ。**データセットエージェントで 사용되는ローカルサブジェクトエリアは、ライブデータアクセスモードに設定してください。これにより、ユーザーデータセキュリティ基準をクエリに渡すことが可能になります。
2. **ローカル主題領域では、複雑な集計ルールを持つ主題領域カラムを避けてください。**ローカル主題領域では、単純な加算メトリックを使用するようにしてください。主題領域には、以下のような様々なメトリックタイプが含まれる場合があります：

a) ローカル主題領域 - 扱いやすいメトリック

1. 単純な加算メトリック（集計ルール＝合計または**カウント**）は、ローカル主題領域において堅牢な貢献要素となります。
2. 論理的セマンティック計算は、他のセマンティックオブジェクトを計算引数としてセマンティック層で直接計算されるオブジェクトです。例えば、利益率は対象領域の列「**利益**」を対象領域の列「**売上高**」で割る論理計算として定義されます。これらのオブジェクトはローカル対象領域に適しています。
3. ローカル主題領域向けメトリクスであっても、ローカル主題領域設計者が集計ルールをオーバーライドする必要がある場合があることに注意してください（**平均集計ルール**を使用）。詳細は下記「**ローカル主題領域 - 非フレンドリーメトリクス**」セクションのステップ3「何をすべきか？」を参照してください。

b) ローカル主題領域 - 非対応メトリクス

1. 高度な複合集計メトリクス（例：ディメンションベースまたは時間ベースの集計メトリクス）。**従業員数値はコストセンター**次元に沿って累積するが、**時間**次元では累積しない。サブジェクトエリアはネイティブに単一メトリクス内で複数の異なる集計ルールを組み合わせることをネイティブにサポートします。サブジェクトエリアでは、クエリで呼び出される特定のディメンションに応じて、適切な集計が動的かつ適切に適用されます。しかしローカルサブジェクトエリア経由で利用する場合、クエリコンテキストがローカルサブジェクトエリアからサブジェクトエリアへ正しく伝達されない重大なリスクがあります。その結果、一部の結果が不正確になる可能性が現実的に存在します。特にトレンドレポートを要求するプロンプトの場合に顕著です。メトリックに複雑な集計が適用されているか不明な場合は、セマンティックレイヤーモデリングツールで確認するよう管理者に依頼してください。
2. 使用する論理テーブルソースによって集計ルールが異なるメトリック。具体例で説明しましょう。一部のメジャーでは、クエリを処理可能な複数の物理ソースが存在する場合、Oracle Analyticsセマンティックレイヤーサーバーが特定のクエリに最適なソースを識別します。ユーザーが次のように要求した場合を考えてみましょう：
2025年の四半期別**サービスリクエスト件数**。Oracle Analyticsセマンティックレイヤーサーバーは、このクエリが月次ベースで時間経過に伴うサービスリクエスト件数の集計を保持する物理ソースによって最適に処理される可能性を透過的に識別します。この場合、月次サービスリクエスト件数を合計して四半期ごとの数値を算出します
非常に高いクエリ性能で。ただし、ユーザーが「2025年の四半期別サービスリクエスト数（従業員ABC）」を要求した場合、基盤サーバーには事前構築済みの集計ソースが存在しない可能性があり、要求を満たすために非常に詳細な物理テーブルを参照する必要があります。この場合、従業員ABCのサービスリクエストIDを四半期ごとにカウントディストインク処理する必要があります。上記の2つのケースは、単一メトリックに対する2つの異なる集計ルールを表しており、どちらのルールが適用されるかは
物理的なソースを活用するにあたり、二つの異なる論理テーブルソースが存在します。ローカルな主題領域がこれらのメトリクスのコンテキストを混同するわずかなリスクはありますが、時間ベースの集計に比べればその程度は軽微です。ローカルな主題領域が許可するクエリの複数組み合わせをテストし、結果を事前に検証することを強く推奨します。
をテストし、結果を検証することを強く推奨します。
3. 対処法：可能な限り、高度な複合集計メトリクスの対象（前述の時間ベースの集計を含む必要がある場合は、ローカル対象領域におけるメトリックについて、選択したメトリックで機能する可能性のある要素とない要素をローカル対象領域で手動テストしてください。Oracle Analytics Self-Serviceでクエリを手動構築します。ローカル対象領域に含めたオブジェクトを使用して、このローカル対象領域メトリックを属性やフィルターと組み合わせ、比較してください。

ローカル対象領域でのクエリ結果は、対象領域に直接構築された同一クエリの結果と完全に一致します。ローカル対象領域に追加したディメンションの組み合わせが、ローカル対象領域にとって**友好的な集計**コンテキスト内に留まる可能性があり、問題が生じない場合もあります。しかし、一部のディメンション組み合わせが**非友好的な場合**、クエリ結果を歪めるリスクがあります。問題を引き起こす可能性のあるディメンションの組み合わせを特定したら、Oracle Analytics Assistantのプロンプトで、それらを適切に組み合わせるようユーザーに警告できます。

3. **ローカルの主題領域メトリクスの集計ルールを上書きします。**一般的なデータセットエージェントのガイダンスと同様に、特定のローカル対象領域メトリクスでデフォルト設定されている集計ルールを手動で上書きする必要があります。上記の「**データセット-エージェントに追加する列**」セクションを参照してください。この推奨事項は、前のセクションで定義された**ローカル対象領域 - フレンドリーメトリクス列**の一部に適用されますが、上記で確認された**ローカル対象領域 - 非フレンドリーメトリクス**の問題には役立ちません。セクション2.2「**データセット-エージェントに追加する列**」と同様に、一部のデフォルト集計ルールを基盤となるオブジェクトがセマンティック層で加算可能なメジャーでない場合、適切なルールで上書きされます。特にローカル主題領域の場合、ローカル主題領域メトリックに集計ルール上書きが必要かどうかを確認する最も効率的なアプローチは、ローカル主題領域の結果を対象領域の結果を手動で比較することです。Oracle Analytics Self-Serviceを使用してクエリを手動で構築し、このローカル対象領域メトリックをローカル対象領域の他の属性列と組み合わせます。**ピボットテーブルのテーブル**（行と列の両方）に合計を設定したことを確認し、ローカル対象領域のクエリ結果とクエリ結果と、主題領域オブジェクトを直接使用した全く同じクエリの結果を比較します。合計値を含め、両者は完全に一致する必要があります。ローカル主題領域対応メトリックを使用している場合で合計値が一致しない場合は、ローカル主題領域定義内のデフォルト集計ルールを上書きする必要があります。一般的な上書きガイドラインの概要は以下の通りです：

- a) カウントとカウント（重複除外）。物理的な直接マッピング（セマンティック計算ではない）を持ち、セマンティックレイヤーで集計ルールが「**カウント**」または「**カウント（重複除外）**」に設定されているメトリックは、ローカルサブジェクトエリアでも集計ルールを「**カウント**」または「**カウント（重複除外）**」に設定する必要があります。
- b) 平均値。物理的な直接マッピングを持ち、セマンティックレイヤーで**平均値**の集計ルールを持つメトリックは、ローカルサブジェクトエリアでも**平均値**の集計ルールを持つ必要があります。
- c) 比率論理計算分母と分子を持つ比率として意味論的に計算される指標
分母は、ローカル主題領域内のローカル主題領域集計ルールで上書きする必要があります。この場合、ローカル主題領域テーブルの合計行数は、主題領域平均計算と完全に一致しないことに注意してください。ローカル主題領域が**平均**の全重み付けを収容できない可能性があるためです。ただし、個々の行は正しい値を示し、合計行は正しさに近づきます。

4. **対象領域からローカル対象領域に含める日付レベルオブジェクトはどれか？**

- a) 特定の日付階層において、サブジェクト領域は通常、複数のレベルオブジェクトを提供します：**日付データ型**のオブジェクト（通常「日」または「日付」とラベル付け）に加え、様々な**日付レベル**（月、週、四半期、年）です。日付レベルは通常、**日付データ型**ではなく**テキストデータ型**です。**日付データ型となるのは日レベルのみ**です。デフォルトでは、ローカル主題領域に**日付レベルオブジェクト**を追加するだけで、Oracle Analytics Assistantが各種レベルをオンザフライでネイティブに計算するのに十分です。これにより、LLMによるプロンプトの解釈と明確な応答の定義が簡素化されます。ローカル主題領域に日付列自体に加えて複数のレベルを日付列自体と共にローカル対象領域に複数のレベルを配置する必要はありません。このガイダンスの例外はカスタムカレンダー（会計年度カレンダー）に関連します。詳細は**ローカル対象領域 - 非フレンドリーメトリクス**を参照してください。

3. インデックス設定とワークブックコンシューマーアシスタントの有効化

3.1. Oracle Analytics Assistant インデックス設定（データセットエージェントデータ）

1. **インデックスの種類。** データセットエージェント内の全列をインデックス化します。データセットエージェントに列を含めながらインデックス化しないユースケースは存在しません。
 - a) **名前と値の属性列**をインデックス化します。
 - b) **メトリクスと日付は名前**でインデックス化します。
2. **同義語を追加します。**
 - a) 各列に最大20個の同義語を追加します。同義語を追加する際は、既存の列やデータセットエージェント内の類似名を持つ他の同義語との曖昧さや混乱を引き起こさないように注意してください。追加する同義語は慎重に選択してください。複数のよく知られた用語を追加しても、必ずしも最良の結果が得られるとは限りません。同義語は、Oracle Analytics Assistantが質問に答えるための追加知識を提供するために使用します。特に注意すべき例としては、ドメイン固有のLLM向けの技術メタデータを明確化したり、LLMがデフォルト値（例：デフォルト日付）を識別するのを支援します。
 - b) 「年」「月」「日」などの単語は予約語であり、同義語として使用できません。
3. **インデックスの更新。** インデックス作成スケジュールは、データセットの更新時に自動更新するか、手動でスケジュール設定できます。
 - a) ローカルサブジェクトエリアの構築または編集中は、デフォルトの更新設定「**データセット更新時**」のままにしておきます。これにより、列の追加や変更といったローカルサブジェクトエリアの編集時にインデックスが更新され、進行中の変更を反映した状態でOracle Analytics Assistantをテストできます。
 - b) ローカルサブジェクトエリアの編集が完了したら、基盤となるデータウェアハウスのデータ更新スケジュールに理想的に一致する事前定義されたスケジュールに設定を変更してください。

3.2. ワークブックでの Oracle Analytics Assistant の設定

1. **ワークブックにデータセットエージェントソースを追加（必要な場合）。** コンシューマーユーザーの Oracle Analytics Assistant 体験用にデータセットエージェントを設計した場合は、そのエージェントを動作させたいワークブックに追加する必要があります。
 - a) ワークブック内に新しいデータソースを追加しますが、既存のデータソースとマッシュアップしないでください。データセットエージェントをワークブック内の他のデータセットや主題領域と結合しないでください。ワークブック内のデータセットエージェントの目的は、コンシューマーユーザーによるOracle Analytics Assistantリクエストをサポートすることのみです。
 - b) ワークブックごとに単一のデータセットエージェントのみを配置してください。ワークブックで複数のデータセットエージェントを使用すると、各プロンプトがどのエージェントを指すのかについて、消費者ユーザーによる曖昧さ解消が必要になります。
2. **ワークブックのプレゼンテーションモードでコンシューマーアシスタントを有効化します。** この操作により、コンシューマーユーザーが閲覧時にこのワークブックのアシスタントパネルを表示できるようになります。ワークブックの「**プレゼンテーションプロパティ**」タブに移動し、「**インサイトパネル**」プロパティをオンにします。これによりOracle Analytics Assistantが有効化され、ユーザーがワークブック上で直接ワークブックアシスタントとウォッチリストにアクセスできるようになります。次に、コンシューマーユーザーに表示するタブを選択します。オプションは以下の通りです：

- a) **ウォッチリスト** - 消費者ユーザーが保存したメトリクスを表示・追跡できるようにします。
- b) **ワークブック アシスタント** - ワークブックのデータセット上で Oracle Analytics Assistant クエリを実行可能にします。完全な機能を利用するには両方の表示を推奨します。



3. **Oracle Analytics Assistantで使用するデータセットを有効化または無効化します。** その直下の「プロパティの表示」タブでは、ワークブック内の全データソースの詳細を確認し、Oracle Analytics Assistantで使用するものと使用しないものを指定できます。これにより、このワークブックからのユーザープロンプト操作に対して、データセットエージェントのみがOracle Analytics Assistantにデータを提供するように設定できます。

3.3. コンシューマーユーザーがOracle Analytics Assistantにアクセスするための権限設定

特定の粒度の細かい権限項目により、管理者は特定の消費者ユーザーのみにOracle Analytics Assistantへのアクセス権を付与できます。したがって、ユーザーグループがこの機能を利用するには、事前に適切なOracle AI Assistant権限を付与する必要があります。適切な権限を付与するには：

1. **カスタムロールを作成します。** Oracle Analyticsでは、ユーザーアクセスはアプリケーションロールを通じて制御されます。これらは**既定のロール**（ConsumerやDVコンテンツ作成者など固定権限を持つ）か、**カスタムロール**（管理者が作成し、ユーザーがアクセスできる機能を正確にカスタマイズ可能）です。

コンシューマーユーザーがOracle Analytics Assistantを利用できるようにするには、**ワークブックでアシスタントを使用する**権限を含むカスタムロールを作成する必要があります。

コンソール → ロールと権限 → アプリケーションロールに移動し、「**アプリケーションロールの作成**」をクリックします。

2. **ロールに権限を追加します。**新規作成したロールで「**メンバーシップ**」タブを開き、*DI*コンシューマーの「vanilla role」を追加します。これにより、新規ロールが標準的なコンシューマーユーザーの全機能を継承します。次に「**権限**」タブに移動し、「**ワークブックでアシスタントを使用する**」権限を追加します。
3. **新しいロールにユーザーまたはグループを割り当てます。**新しいロールの「**メンバー**」タブで、個々のユーザーまたはグループ全体を割り当てます。これにより、Oracle Analytics Assistantを使用する権限が付与されます。

4. アシスタント消費者プロンプトガイドライン

Oracle Analytics Assistantとのやり取りの効果を最大化するには、以下のガイドラインに従ってください。これらは、基盤となるデータセットに関する直接的な知識を持たない消費者ユーザーを支援することを目的としています

ビジネス文脈に基づいた質問を構築する支援を目的としています。上記の更新後も、ユーザーは一般的なプロンプト作成ガイドラインに従う必要があります。

1. 構造化と言い換え

a) Oracle Analytics Assistantが満足のいく回答や関連性のある回答を返さない場合：

- より簡潔または明確な表現で質問を言い換えてみてください。
- 過度に複雑なクエリやネストされたクエリは避けてください。必要に応じて複数の小さな質問に分割してください。

b) 例えば、以下のようにする代わりに：

「前四半期に利益が減少したが、今四半期に改善した電子機器分野の上位3地域は？」

次のように変更してください：

「前四半期の電子機器部門における地域別利益の推移は？」

続いて：

「今四半期はどう変化しましたか？」

2. 列名やフィールド値を参照する際は、入力中に短く間（1～2秒）を置くこと。

a) Oracle Analytics Assistantは、アクティブなデータセットのフィールドに基づいて自動提案を表示します。

b) 候補から選択することで実際のメタデータとの整合性が確保され、結果の精度が向上します。

c) 例:

「customer_」と入力し始めると、customer_segment、customer_regionが表示されるので、適切なものを選択します。

3. 文脈の引き継ぎ動作を理解する。

a) Oracle Analytics Assistantは、同一の会話内における過去の質問と回答の文脈を記憶します。

b) 適用されたフィルター（例：地域、製品ライン、期間）は、明示的に変更されない限り、後続の質問でも維持されます。

c) 消費者ユーザーは以下のプロンプトを使用でき、前四半期データについてはコンテキストが引き継がれます。例：

- Q1: 「過去5年間の売上トレンドを表示」
- Q2: 「テクノロジー製品のための推移を表示」
- Q3: 「製品サブカテゴリ別に内訳を表示」
- ユーザーは新しいプロンプトのセットを開始したい場合があります。その場合は、上部の「アシスタント履歴をクリア」オプションをクリックしてコンテキストをリセットし、新しい分析パスを開始してください。

4. クエリの機能的焦点

a) 消費者ユーザーは、業務運営に関連する機能的で目的志向の質問をすることが想定されます。例：

- 「今月のトップセールス担当者は誰ですか？」

- 「過去6ヶ月間で離職率が最も高い部門はどこですか？」
- b) 以下については質問しないでください：
- データセットの構造、スキーマ、内部ロジックに関する質問。
 - 技術的メタデータまたはデータ・リネージ。
- c) Oracle Analytics Assistant は、データセットに対するブラックボックス抽象化の中で動作し、ワークブックの観点から純粋にインサイトの提供に焦点を当てています。

5. 制限事項と回避策

1. **フィルターがプロンプトに自動的に渡されない。** 通常、ワークブックは、各キャンパスのビジュアライゼーションに適用される一連の事前構築済みデータフィルターとともに消費者ユーザーに公開される。これらのデータフィルターは設計される作成者によって設定され、Canvasフィルター、ダッシュボードフィルター、あるいはユーザーベースのデータセキュリティフィルターで構成される場合があります。コンシューマーユーザーがOracle Analytics Assistantのライブプロンプトを操作する際、これらのフィルターが自動的にプロンプトに引き継がれることを期待するでしょう。例えば、消費者が売上ダッシュボードを閲覧している場合、キャンパスの最上位フィルターがデフォルトで、担当組織「XYZ」と担当地域「ABC」に可視化を限定していると仮定します。
 - a) **ダッシュボード/キャンパスフィルター。** ユーザーがOracle Analytics Assistantに質問する場合、ダッシュボードやキャンパスのフィルターは自動的にプロンプトに送信されません。ユーザーはプロンプト内で明示的にフィルターの値を指定する必要がある場合があります。例：「組織XYZおよび地域ABCについて」。Oracle Analytics Assistantにおけるキャンパスおよびダッシュボードフィルターのプロンプトへの自動転送機能は開発中ですが、現時点では製品の一部ではありません。
 - b) **ユーザーレベルのデータセキュリティフィルター。** これらは、データセットエージェント（データセットまたはローカルサブジェクトエリア）に対してユーザーに紐付けられたOracle Analyticsクエリサーバー生成の一部であるため、Oracle Analytics Assistantによって尊重されます。
2. **会計年度カレンダーまたはカスタムカレンダー。** データセットエージェントのソースが、会計年度が1月1日から12月31日までのグレゴリオ暦形式と一致しないカスタムカレンダーを利用している場合（例：Oracleの会計年度が5月31日終了・6月1日開始）の場合、消費ユーザーに対しプロンプト表現に注意するよう警告する必要があります。これによりOracle Analytics Assistantが、インデックス用にDataset-Agentに既に組み込まれている正しいカスタム時間列を選択できるようになります。カスタムカレンダーの場合、「過去3四半期の売上推移を表示」「過去2年間の比較」といった平易な英語でOracle Analytics Assistantに質問すると、応答が得られないか誤った結果が返される可能性があります。Oracle Analytics Assistantが自動的に時間を集計し、グレゴリオ暦を採用し、1月1日から12月31日までを1年間とみなします。正確な時間集計結果を得るには、データセットエージェントから日付データ型の列を削除し、カスタムカレンダー用に計算された時間階層レベル列（月、四半期、年）のみを追加する必要があります。例えば、Oracle会計年度カレンダーの場合、第1四半期（Q1）は6月、7月、8月の月次データをロールアップします。データにカスタムカレンダーを使用している場合、この用途に合わせてデータセットエージェントを設定するには、以下のガイドラインを参照してください。
3. **Oracle Analytics Assistantがフィルタリング用に誤った列を選択しています。** Oracle Analytics Assistantがプロンプトにフィルター値が含まれる場合（例：「地域XYZの売上を表示」）、Oracle Analytics Assistantはプロンプトの対象列と選択された値の両方を解釈します。ユーザーがプロンプトをこの状態で放置すると、プロンプト内の正確な値が実際のデータと一致しないリスクや、選択すべき列名の曖昧性が生じる可能性があります。これによりOracle Analytics Assistantが誤った結果を返す可能性があります。この問題を軽減するには、プロンプト入力時に**自動選択機能**を活用してください。プロンプトのフィルター部分を入力中に短時間（1〜2秒）間を置き、アクティブなデータセットフィールドに基づく自動候補を表示させます。ユーザーはプロンプト用の列と正確なフィルター対象メンバー値の両方を選択できます。これによりOracle Analytics Assistantが返す結果における曖昧さのリスクを完全に排除できます。

4. **Oracle Analytics Assistantの結果が「カウント」/「平均」メトリクスを適切に集計していません。** Oracle Analytics Assistantが返す結果は、データセットエージェントで指定された集計ルールに従ってメジャーを集計します。データセットまたはローカルサブジェクトエリアのデフォルトルールは合計集計ルールです。前述の「データセットエージェントのメトリクス集計ルールを適切に設定する」ステップで説明したように、データセットエージェントがデータセット-エージェント用に設定されていることが重要です。
- Dataset-Agent メトリクス集計ルールの適切な設定** ステップで述べたように、Dataset-Agent を各メトリックに含まれる適切な集計ルール。これは特に、データセットエージェントがローカルな主題領域として構築される場合に当てはまる。
5. **Oracle Analytics Assistant は複雑な集計メトリックを適切に活用していません。** ローカル主題領域の場合、前述の「ローカル主題領域で複雑な集計ルールを持つ主題領域列を避ける」ステップで説明したように、基盤となる主題領域のメトリックの一部が複雑な集計ルールとして設定されている可能性があります。例として、時間ベースの集計メジャーや複数集計ルールを持つメジャーが挙げられます。これらのメトリックは、ローカルサブジェクトエリアの属性の全組み合わせにおいて正常に動作しない可能性があります。この制限を緩和する主な方法は、ローカルサブジェクトエリア内でこれらのメトリックが失敗する箇所をテストし、問題を引き起こさない属性/ディメンションのみを含むようにローカルサブジェクトエリアの設定を編集することです。
6. **Oracle Analytics AssistantがDataset-Agentに存在する可能性のある計算を複製する場合があります。** Dataset-Agentで計算が既に定義されているにもかかわらず、特定のプロンプトによりOracle Analytics Assistantが独自の計算を再作成することがあります。例えば、Dataset-Agentに利益率（profit rate）が存在する場合でも、「利益率（%）を求めよ」というプロンプトにより、Oracle Analytics Assistantは既存の計算を活用せず別の計算を再計算することがあります。
- 既存の計算を活用せずに別の計算を再実行する可能性があります。このリスクを軽減するには、インデックス設定で既存の列に同義語を追加し、Oracle Analytics Assistantがプロンプト内でこの列を適切に認識できるようにしてください。
7. **Oracle Analytics Assistantの計算に関する課題。** Oracle Analytics Assistantは現在、ユーザープロンプトが暗示するあらゆる種類の計算を「解釈」できない場合があります。単純に見える質問でも、データセットエージェントに適切な列が設計されていない場合、Oracle Analytics Assistantは計算を生成しようと試み、いくつかの制限に遭遇する可能性があります。Oracleはこの機能の強化に取り組んでいますが、現在の制限は以下の通りです：
- a) **総売上に対する割合：**ユーザーが地域別の売上高を総売上高に対する割合で表示するよう要求する場合。その計算がデータセットエージェントに事前に存在しない場合、Oracle Analytics Assistantはまだ解決できない可能性があります
 - b) **平均を上回るメンバー：**ユーザーは、リクエストの結果セットにおいて平均を上回るレコードのみを強調表示するよう要求する場合があります。例：「フランスで販売された製品を表示し、その選択範囲において平均を上回る売上を達成している製品を強調表示する」。
- Oracle Analytics Assistantは、この計算をまだ解決できない可能性があります。
- Oracle Analytics Assistantはこの計算をまだ解決できない可能性があります。
- c) **メトリック範囲フィルタリング：**Oracle Analytics Assistant は、次のようなメトリック範囲フィルタリングを正しくレンダリングできない場合があります。「売上高が1000から5000の顧客を表示」といったプロンプトです。このプロンプトは、クエリのコンテキストが単純な場合には正しい結果を返すかもしれませんが、クエリの粒度/フィルタリングコンテキストがより複雑な場合には問題が発生する可能性があります。
- クエリの文脈が単純な場合には正しい結果を返すこともありますが、クエリの粒度やフィルタリングの文脈が複雑になると問題が発生する可能性があります。
8. Oracle Analytics Assistantは、質問で正しい列を選択しているにもかかわらず、有効なコンテキストで「質問に答えるデータがありません」と表示される場合があります。

お問い合わせ

+1.800.ORACLE1 までお電話いただくか、oracle.com をご覧ください。北米以外のお客様は、oracle.com/contact で最寄りのオフィスをお探してください。



著作権 © 2025, Oracle および/またはその関連会社。無断複写・転載を禁じます。本資料は情報提供のみを目的として提供されており、その内容は予告なく変更される場合があります。本資料は、誤りが無いことを保証するものではなく、また、明示的、口頭、または法的に黙示されるものを含め、商品性または特定目的への適合性に関する黙示の保証や条件を含む、その他のいかなる保証や条件の対象ともなりません。当社は、本資料に関する一切の責任を明示的に否認し、本資料によって直接的または間接的に契約上の義務が生じることはありません。当社の事前の書面による許可なく、いかなる目的においても、電子的または機械的な手段を問わず、本資料を複製または送信することはできません。

OracleおよびJavaは、Oracleおよび/またはその関連会社の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標である場合があります。

インテルおよびインテル Xeon は、インテルコーポレーションの商標または登録商標です。すべての SPARC 商標はライセンスに基づき使用されており、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMD ロゴ、および AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices の商標または登録商標です。UNIX は The Open Group の登録商標です。0120